

[Activity Report]

## Health development movement in harmony with the community

— A report on the activities of the first year of the aino-machi-no-hokenshitsu movement —

Yumi Hiruta\*, Masumi Kono\*\*, Yoshiaki Ishitani\*\*\* and Eiko Fuse\*\*\*

\* Aino University

\*\* Ex-Aino Gakuin College

\*\*\* Aino Hospital

### Abstract

Based on the fundamental ideas of “Health Japan 21” – a national health development movement for the 21st century, one year has passed since the establishment of “aino-machi-no-hokenshitsu”, which aspires to be a model business of nursing services in a community. The Staff of the nursing unit of Aino Hospital and instructors of Aino Gakuin College have been managing this business.

An information booth was opened in the outpatient section and Aino Hospital computer website was created to facilitate easier consultation regarding health care in the community.

Moreover, a ‘health festival’ featuring six events and lectures on health was held. The total number of participants was 569. Most of these participants were women who found the festival informative and enjoyable. Measurement of bone mineral density was one of the most popular requests during the festival.

It is difficult to determine the exact effectiveness of the business at this stage, but there have been many positive responses from people of the community. We will strive to continue and improve this health development movement.

**Key words :** health development movement, community health, health education, health promotion

## 地域と響きあう健康作り運動をめざして

——「あいのまちの保健室」開設1年目の活動報告——

蛭田由美\*, 河野益美\*\*, 石谷嘉章\*\*\*, 布施榮子\*\*\*

**【要旨】** 21世紀における国民健康作り運動「健康日本21」の基本理念に基づき、地域における看護提供モデル事業の一環として「あいのまちの保健室」を立ち上げ、1年が経過した。

「あいのまちの保健室」は、藍野病院看護部と藍野学院短期大学の教員有志によって運営された。常設コーナーとして、藍野病院内科外来の窓口とインターネット上のサイトを開設し、健康や介護の相談に応じた。この他、健康祭りや健康に関する講演会など6回の催し物を開催した。企画された催し物の参加者は、延べ569名であった。参加者の殆どは女性で、催し物への参加満足度は高かった。骨密度の測定は、催し物の中で最も参加率が高かった。開設1年で本事業の効果を判定することは困難があるが、参加者総数から推測すると周辺地域の人々の反響はあったといえる。今後も本事業を継続して、地域住民の健康作りをサポートしたいと考える。

キーワード：健康作り運動、地域保健、健康教育、ヘルスプロモーション

### はじめに

「あいのまちの保健室」の活動が2年目を迎えた。藍野病院の職員が生き生きと活発に企画運営に参加している姿は力強く頼もしく、「あいのまちの保健室」の将来の発展が確信される。

2年前の2002（平成14）年12月、筆者らが藍野病院2階の看護部で話し合いを持ったのが始まりであった。学校法人藍野学院が大学を作る計画と、医療法人恒昭会が藍野病院を総合病院にする計画が進められており、この2つの計画の成功のためにも、藍野病院がより地域住民に親しまれ、より地域に開かれた病院になることが望まれていた。この思いは、布施看護部長とまちの保健室構想を相談し始めた最初から共感でき、相談を進めるにつれて深まっていった。

まちの保健室事業とは、「健康日本21」の趣旨をふまえて、日本看護協会が都道府県支部に呼びかけて全国展開している地域における看護提供システムモデル事業<sup>1)</sup>である。藍野病院がますます地域住民に親しまれ、地域に開かれた病院になるためには、藍野病院に「まちの保健室」を開設することが最も効果的ではないかと考えられた。そこで、早速看護部へ飛んでいき、布施看護部長に相談を持ちかけたという次第であった。日頃の多忙な業務の中、さらに負担を増すことになるのではないかと懸念もあったが、看護部長は快く引き受けてくださり、以降病院看護部が中心となって企画運営が進められた。そればかりでなく、病院をあげての強力なバックアップのもと、事業は進められた。「あいのまちの保健室」という名称に、筆者らの思いが込められている。藍野病院、藍野学院の「藍野」

\* 藍野大学  
\*\* 前藍野学院短期大学  
\*\*\* 藍野病院

と「アイノ」という発音から想像される「愛の」を掛け合わせ、その両方の意味も併せ持つように、ひらがなで「あいのまちの保健室」と命名した。本事業のバックボーンとなる藍野病院は精神医療および老人医療の長年の実績を持ち、短期大学には精神医学・看護、老人医学・看護の業績を持つ教育スタッフが揃っており、近年の高齢社会における健康作りのニーズに応えるのにふさわしいと考えられた。

本事業は、地域住民と保健ワーカーがともに作り上げていくコミュニティヘルスとその過程を当事者として研究するアクション・リサーチである。事業の発展は、地域住民の健康作りの発展につながるものである。そこで、「あいのまちの保健室」の活動が1年を経過した今、1年間の活動を振り返り、活動内容を評価し、今後の活動の発展の資料とする。

## I 本事業の目的

本事業の目的の一つは、21世紀における国民健康作り運動「健康日本21」の基本理念に基づき、地域の人々が健康で明るく元気に生活できる社会の実現のために、保健医療福祉およびその他の分野の専門職と連携して地域の人々の主体的な健康作りをサポートすることである。特に精神障害を持つ人および高齢者とその家族を中心とした人々の健康作りのサポートを主眼とする。さらに、21世紀初頭における母子保健の国民運動計画「健やか親子21」の主要課題に基づき、子どもの心の安らかな発達の促進と両親の育児不安の軽減をサポートすることである。地域の人々が自ら主体的に行う健康作り活動の中で、新しい健康観および新しい保健行動を獲得し、行動を変容させることを目的とする。

目的のもう一つは、本事業を企画運営する経験が病院看護職の職務満足度に与える影響と、活動のプロセスを通して看護職がどのように自らの専門性を高めていくのか、その過程を明らかにすることである。そのため、今年度から看護部では本事業を現任教育の一環として位置づけ、企画運営を看護職スタッフに任せた。看護職スタッフが主体的に取り組むことによって、先に述べた目的が達成できるようにするためである。しかし、この目的の達成のためには、一定の期間をとって、看護職の成長ぶりを見極める事が効果的と思われるため、今回の報告からは割愛し、次回報告に譲ることとした。

## II 事業の展開方法

事業テーマ：地域との響きあいで広げる保健事業「あいのまちの保健室」

### 1 実施地域

拠点とする機関は、医療法人恒昭会藍野病院および学校法人藍野学院藍野学院短期大学であった。茨木市および高槻市を中心とした大阪府北東部にお住まいの地域住民の皆様を対象とした活動を展開した。

### 2 実施体制

運営本部は、筆者ら4名即ち藍野病院看護部長および副看護部長と藍野学院短期大学教授と講師が担当した。イベントの準備、当日の運営などの実働隊として、藍野病院各看護病棟から振り当てられた勤務者が実際の運営に当たった。また、病院職員および短期大学学生のボランティアが運営に協力した。

### 3 実施場所

開催場所は、藍野病院および藍野学院短期大学であった。一部事業は、要請のあった中学校および小学校へ出向いて行った。

### 4 事業内容

事業内容は以下のようであった。

#### 1) 常設コーナー：何でも健康相談・何でも介護相談

##### ① 藍野病院内科外来 / 藍野病院地域医療連携室

月曜日から土曜日まで 9:00～15:00  
祝祭日を除いた上記の曜日、時間に、内科外来、のちに地域医療連携室に窓口を開設し、健康相談、介護相談に応じた。担当者は、内科外来看護師および地域医療連携室の保健師であった。

##### ② インターネット上にサイトを開設し、相談に応じた。

アドレスは、ainomachi@koshokai.or.jp  
担当者は、上記①と同様であった。

#### 2) 2003年5月10日(土)・11日(日)：看護の日・健康祭り

地域住民との交流を図ると同時に、健康作り運動を推進するために、下記の催し物を開催した。

##### ① 骨密度(骨量)測定：看護部看護師、看護学生ボランティア

- ② 高齢者体験：看護部看護師
  - ③ 車椅子乗車体験：看護部看護師
  - ④ 妊婦体験：看護短大教員，看護学生ボランティア
  - ⑤ 子育て・発達相談・母乳相談：看護短大教員，乳業会社栄養士
  - ⑥ 栄養相談：栄養部栄養士
  - ⑦ 健康相談：看護部看護師，看護短大教員
- 開催場所は，藍野病院ロビー周辺と一部外来であった。

3) 2003年7月12日(土)：介護講座・手作り介護用品

地域住民との交流を図るとともに，入院および在宅による介護のサポートおよび介護する人の健康をサポートするために，下記の催し物を開催した。

- ① 介護用品手作り教室：看護短大教員，看護部看護師  
布とビーズで作る指の拘縮予防グッズ  
枕カバーや洗濯ネットとビーズを利用した日常用の介護用品
- ② 骨密度(骨量)測定：看護部看護師，看護学生ボランティア
- ③ 介護用品の展示：看護部看護師
- ④ 栄養相談：栄養部栄養士  
誤飲を防ぐ食べ物，消化の良い食べ物，繊維の多い便秘を予防する食品，  
骨量を維持するための食事・食品，体脂肪を増やさない食事など
- ⑤ 健康相談：看護部看護師，看護短大教員  
血圧測定，介護疲れを防ぐ方法  
開催場所は，藍野病院ロビー周辺と一部外来であった。

4) 2003年11月29日(土)：公開講座・講演会

時代の要請と地域住民のニーズに応えるために，次のようなテーマによる講演会を行った。  
テーマ：医者任せではいけない健康管理  
講師：医療法人恒昭会 藍野病院院長 近藤元治  
会場：藍野ホール  
運営スタッフ：看護部看護師，看護短大教員，看護学生ボランティア

5) 2004年2月7日(土)：公開講座・講演会

時代の要請と地域住民のニーズに応えるために，次のようなテーマによる講演会を行った。  
テーマ：大腸がんと食生活 —— その予防 ——  
講師：学校法人藍野学院 藍野学院短期大学教授

中野博重

会場：藍野ホール

運営スタッフ：看護部看護師，看護短大教員，看護学生ボランティア

- 6) 2004年3月2日(火)：出張講座・性教育講演  
隣接市の中学校からの要請に応じ，ピア・カウンセラーの研修を受けたボランティアの学生3名とともに性教育の講演を行った。

テーマ：かけがえのない生命

講師：学校法人藍野学院 藍野学院短期大学教授  
蛭田由美

学校法人藍野学院 藍野学院短期大学2年生  
ボランティア3名

会場：高槻市立A中学校体育館

対象：中学2年生

- 7) 2004年3月12日(金)：出張講座・小学校総合学習

地元小学校からの模擬授業の要請に応じ，医療保健職を担う次世代に対して，看護師を中心とした保健職の仕事の内容についてプレゼンテーションを行った。

テーマ：職業インタビュー・看護師への道

講師：学校法人藍野学院 藍野学院短期大学教授  
蛭田由美

学校法人藍野学院 藍野学院短期大学3年生  
ボランティア5名

会場：茨木市立B小学校

対象：小学校4年生，5年生，6年生および保護者

## 5 運営方法

本年度の全ての事業は，藍野病院看護部と藍野短期大学が中心となり，病院の関連部門の協力を得て運営された。病院スタッフおよび短期大学教員は当日を通常勤務とし，あいのまの保健室への出向として運営に当たった。看護学生には，ボランティアを募集し参加を募った。

## Ⅲ 結 果

あいのまの保健室は昨年1年間で7件の事業を企画運営したが，本報告では，全般的な利用状況と，利用者の声などの根拠を示すことができるものとして調査結果を基にした四つの事業について報告する。

表1 事業別参加者数

事業名	開催日	参加者数
看護の日 健康祭り	2003年	
	5月10日(土) 5月11日(日)	100名 70名
介護教室 手作り介護用品	2003年 7月12日(土)	34名
講演会 医者任せではいけない 健康管理	2003年 11月29日(土)	234名
講演会 大腸がんと食生活 —その予防—	2004年 2月7日(土)	158名
延べ参加者数		596名

### 1 利用状況

常設コーナー「何でも健康相談、何でも介護相談」の利用状況として、内科外来の窓口での相談は、通常の受診時の相談との区別をつけにくいため、件数を把握できない状態であった。

インターネット上のサイトに問い合わせを寄せてきた事例は1件のみで、家庭における対応困難な精神科患者の事例であった。直ちに内科外来看護師が折り返し電話による連絡を取り、相談に応じた。電話による相談と応答の数回のやりとりのうち、藍野花園病院外来受診の運びとなり、家族の困難と患者の問題状況が軽減された。この対応に対して、相談家族から感謝の言葉が聞かれた。インターネットの利用者は限られると考えられるため、今後も急激なアクセスの増加は予想できないが、サイトをさらに充実させる必要がある。当面は、外来や電話相談への丁寧な応答を続けることが重要と考えられる。

その他の事業の利用者数は表1に示すようであった。看護の日・健康祭りは2日間合わせて170名、介護教室は34名、第一回講演会は234名、第二回講演会は158名で、延べ参加者数596名であった。

### 2 事業参加者アンケート結果

「看護の日・健康祭り」、「介護講座・手作り介護用品」では、事業内容が参加者のニーズに添っているか、地域住民がどのような健康作り運動を望んでいるかを把握するために、次のような項目に関して調査を行った。

#### 調査項目

- |              |               |
|--------------|---------------|
| 1 催し物への参加満足度 | 2 参加した時間帯     |
| 3 会場までの所要時間  | 4 催し物を知ったきっかけ |
| 5 今後の参加意志    | 6 今後の案内の送付希望  |

表2 「看護の日」「介護教室」参加者に対する調査結果

質問内容と項目	結果(%)	
	看護の日 健康祭り	介護教室 手作り介護用品
(1) 来場者数	170名	34名
調査票の有効回答数	78	23
回収率	45.9%	67.6%
(2) 回答者の性別		
男性	19.4%	17.4%
女性	80.6%	78.3%
n. a.	0.0%	4.3%
(3) 回答者の年代		
10・20代	9.1%	0.0%
30・40代	16.7%	4.3%
50代	25.8%	26.1%
60代	39.4%	39.1%
70代	4.5%	26.1%
n. a.	4.5%	4.3%
(4) 催し物への参加満足度 (良かったという回答の割合)		
① 骨密度測定	89.7%	86.9%
② 高齢者体験	87.1%	—
③ 妊婦体験	83.3%	—
④ 車椅子体験	84.6%	—
⑤ 健康相談	97.4%	100%
⑥ 子育て相談	85.9%	—
⑦ 栄養相談	91.0%	100%
⑧ 介護用品の手作り	—	100%
(5) 参加した時間帯		
午前	34.6%	82.6%
午後	38.5%	17.4%
n. a.	26.9%	0.0%
(6) 会場までの所要時間		
① 30分以内	72.7%	60.9%
② 30分から1時間	9.1%	13.0%
③ 1から1時間30分	13.0%	13.0%
④ 1時間30分以上	3.4%	8.7%
n. a.	1.8%	4.3%
(7) 催し物を知ったきっかけ		
① 折り込みチラシ	38.9%	—
② 友人・知人から	25.0%	30.4%
③ ポスターを見て	15.3%	34.8%
④ 病院職員の勧めで	16.7%	17.4%
⑤ その他	4.2%	17.4%
(8) 今後の参加の希望		
はい	98.5%	100%
いいえ	1.5%	0%

- 7 今後の催し物希望などの 8 性別・年齢  
自由記述

表2に調査結果を示したが、この結果からみると、利用者は女性が圧倒的に多く、8割前後を占めていた。催し物への参加の満足度は高く、80%以上であった。参加のきっかけとなったものは、新聞の折り込みチラシが40%近くにのぼり、宣伝効果は高いと考えられる。看護の日・健康祭りは2日間、介護教室・手作り介護用品は1日の催しであった。開催日の天候は、看護の日・健康祭りの第1日目は晴れ、2日目は曇り

時々小雨で、介護教室・手作り介護用品は曇り時々雨であった。参加者数は天候の影響を受けたと思われるが、この参加者数は、当初の企画運営委員の予想を超えていた。実施日は病院ロビー周辺が大変にぎやかな雰囲気となり、楽しい催しとなった。参加者の6割以上の人は、会場まで所要時間30分以内の距離から足を運んでいた。健康教育の機会が身近にあることは参加率を上げる要因の一つとなると考えられる。催し物では骨密度測定の希望者が多かった。年齢的には中高年者が骨密度の測定を希望して参加した。中高年層の人は、骨密度や骨粗鬆症に大変関心が高いということが解る。参加者の殆どは今後も参加したいと答えており、今後の継続した参加が期待される。

### 3 講演会参加者への「健康に関する意識調査」結果

地域住民、一般の人々の健康観や保健行動の傾向を知るために、まちの保健室主催の2回の講演会に参加した人を対象として、健康に関する意識調査を行った。調査内容は以下のようであった。

#### 健康に関する意識調査項目

- |               |                    |
|---------------|--------------------|
| 1 健康の自覚       | 2 保健行動の度合い         |
| 3 普段やっている健康法  | 4 普段やっている健康法のきっかけ  |
| 5 これからやりたい健康法 | 6 やりたい健康法ができる条件    |
| 7 健康に関する不安    | 8 今日の催しに参加して得られた効果 |
| 9 年齢・性別       |                    |

2回の調査結果の平均を、図1から図5に示した。ほぼ7割の人が自分を健康だと考えていた。現在の健康上の不安は、「ストレスがたまる・精神的に疲れる」がトップを占め、その他「体力が衰えてきた」、「肥満が気になる」であった。以上のような健康に関する認識は、1996年に（財）健康・体力づくり事業財団が行った『健康づくりに関する意識調査』<sup>2)</sup>の結果と同じ様な傾向を示していた。現在行っている健康法は、主に「過労を避け、睡眠・休息を十分に取る」、「食事・栄養に気を配る」などで、これからやろうと思っている健康法は「運動やスポーツ」であった。昨今の中高年層のスポーツ熱を反映しているかもしれない。現在行っている健康法のきっかけとなったことのトップは、「テレビ・新聞・雑誌」であった。この結果によると、マスメディアによる情報の普及効果は大きい

表3 健康に関する意識調査結果

質問内容と項目	結果：数 (%)	
	第一回講演会11/29 「医者任せではいけない健康管理」 n=220	第二回講演会 2/7 「大腸がんと食生活」 —その予防— n=148
(1) 健康の自覚		
①非常に健康だと思う	14 (6.4)	12 (8.1)
②健康な方だと思う	134 (60.9)	90 (60.8)
③あまり健康でないと思う	56 (25.5)	41 (27.7)
④健康でないと思う	15 (6.8)	4 (2.7)
n.a.	1 (0.5)	1 (0.7)
(2) 保健行動の度合い		
①よく気をつけている	19 (8.6)	12 (8.1)
②気をつけている方だと思う	116 (52.7)	81 (54.7)
③あまり気をつけていない	75 (34.1)	52 (35.1)
④気をつけていない	8 (3.6)	2 (1.4)
n.a.	2 (0.9)	1 (0.7)
(3) 普段の健康法		
①過労を避け、睡眠休養	109 (49.5)	78 (52.7)
②食事・栄養	100 (45.5)	59 (39.9)
③酒・タバコを控える	63 (28.6)	41 (27.7)
④定期健康診断	33 (15.0)	21 (14.2)
⑤運動やスポーツ	39 (17.7)	26 (17.6)
⑥情報や知識を増やす	64 (29.1)	42 (28.4)
⑦その他	9 (4.1)	6 (4.1)
⑧何もやっていない	41 (18.6)	33 (22.3)
(4) 健康法のきっかけ		
①自分が病気をしたので	42 (19.1)	22 (14.9)
②家族や友人が病気をしたので	42 (19.1)	31 (20.9)
③医師や看護師に勧められた	17 (7.7)	5 (3.4)
④新聞・テレビ・雑誌	61 (27.7)	52 (35.1)
⑤家族や友人に勧められて	21 (9.5)	14 (9.5)
⑥人生の節目にあたって	18 (8.2)	16 (10.8)
⑦保健所や役所からの案内	6 (2.7)	8 (5.4)
⑧以前からやっていた	56 (25.2)	30 (20.3)
⑨その他	18 (8.2)	14 (9.5)
(5) これからやりたい健康法		
①過労を避け、睡眠休養	96 (43.6)	52 (35.1)
②食事・栄養	86 (39.1)	61 (41.2)
③酒・タバコを控える	16 (7.3)	9 (6.1)
④定期健康診断	71 (32.3)	46 (31.1)
⑤運動やスポーツ	128 (58.2)	93 (62.8)
⑥情報や知識を増やす	30 (13.6)	17 (11.5)
⑦その他	3 (1.4)	1 (0.7)
⑧何もない	13 (6.5)	8 (5.4)
(6) (5)ができるための条件		
①時間が有れば	167 (75.9)	111 (75.0)
②仲間がいれば	53 (24.1)	39 (26.4)
③やり方がわかれば	26 (11.8)	20 (13.5)
④施設や設備があれば	56 (25.5)	35 (23.6)
⑤教えてくれる人がいれば	22 (10.0)	19 (12.8)
⑥経済的なゆとりがあれば	71 (32.3)	46 (31.1)
⑦その他	10 (4.5)	2 (1.4)
(7) 健康上の不安		
①持病がある	36 (16.4)	16 (10.8)
②がんが怖い	49 (22.3)	36 (24.3)
③心臓病が怖い	27 (12.3)	17 (11.5)
④糖尿病が怖い	39 (17.7)	28 (18.9)
⑤体力の衰え	83 (37.7)	51 (34.5)
⑥ストレス、精神的に疲れる	117 (53.2)	74 (50.0)
⑦肥満が気になる	80 (36.4)	59 (39.9)
⑧その他	7 (3.2)	3 (2.0)
⑨特がない	20 (9.1)	10 (6.8)
(8) 今回の催し物の効果		
①やる気になった	81 (36.8)	43 (29.1)
②健康法が見つかった	30 (13.6)	28 (18.9)
③方法がわかった	66 (30.0)	75 (50.7)
④仲間が見つかった	3 (1.4)	3 (2.0)
⑤どこへ行けばできるかわかった	25 (11.4)	8 (5.4)
⑥その他	16 (7.3)	4 (2.7)
⑦あまりはっきりしない	10 (4.5)	7 (4.7)
(9) 対象の平均年齢 (±SD)	34.78 (±19.8) 歳	31.67 (±17.7) 歳
(10) 対象の性別		
男性	42 (19.1)	35 (23.6)
女性	166 (75.5)	104 (70.3)
n.a.	12 (5.5)	9 (6.1)

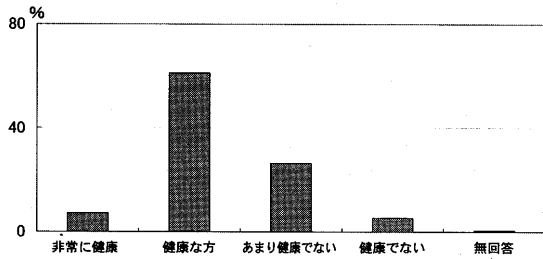


図1 健康の自覚

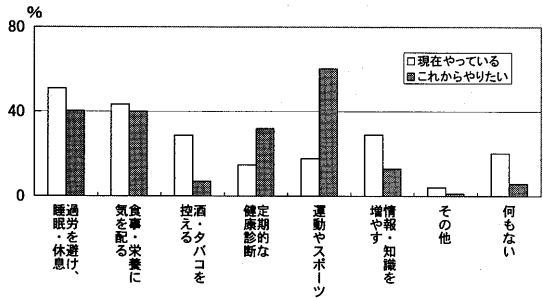


図2 健康法：現在とこれから

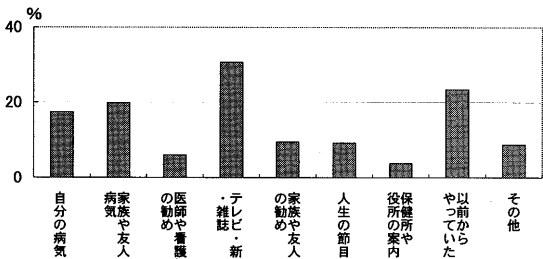


図3 健康法実行のきっかけ

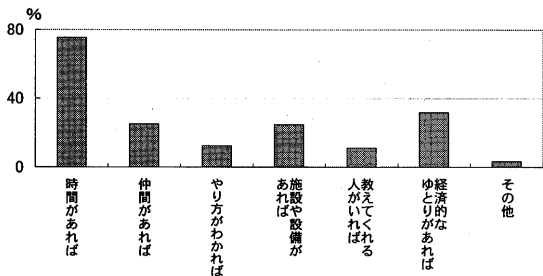


図4 健康法実行の条件

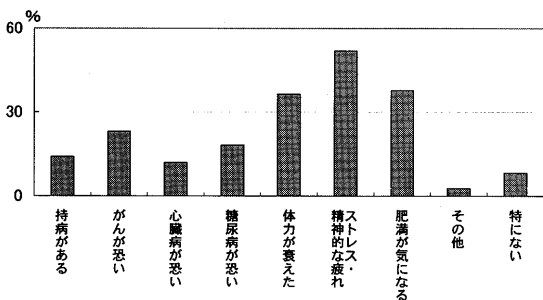


図5 健康上の不安

と考えられ、映像や活字を通じた情報発信は常に続けられる必要がある。これからやろうと思っている健康法について、「時間があれば」できるという回答が80%近く、「経済的なゆとりがあれば」できるという回答が40%近くに達していた。これらの意識に関して、発想の転換ができるような働きかけが必要であろう。例えば、時間はつくるものであるということや、お金をかけないでできる健康法を広く紹介すること、お金や時間をかけず自宅の近くでできる健康法の考案と実行などが必要と考えられる。講演会に参加した人は、やる気になった、方法がわかったなどの感想を持っていた（データ未提示）。地域住民にとって、時々講演会などに参加して自分自身に対する刺激を得ることによって、保健行動を変容させるきっかけが必要と考えられる。本事業に期待されることは、常に地域住民の身近にあって健康に関する情報を発信しつづけ、いつでも住民のアクセスに応えられるように準備態勢を整えておくことであろう。

#### IV 考察

「健康に関する知識や情報が増えるだけでは行動の変容は起こらない」というのが、現在の健康教育に携わる人々の共通認識であると言われている<sup>3)</sup>。それでは、何が人々の行動の変容を起こす原動力となるのだろうか。本事業はそれを見つけ出す、あるいは創り出すための活動であるが、それが見つかるまで、効果は小さいかもしれないが、教育的支援と環境的支援を続ける必要がある。ここでいう「環境的支援」とは、WHOが提唱するヘルスプロモーションの概念の支援を指しており、単に物理的な環境や医療サービスを表すのみでなく、健康を取り巻く状況を左右する社会的な影響力を指している<sup>4)</sup>。本事業の運営にあたっては、常にヘルスプロモーション PRECEDE-PROCEED モデルに準拠することに努め、社会診断から始まり結果評価に至るまでの段階を意識して活動を進めたいと考えているが、この中で政策的、法規的な実行の活用が不十分であり、これからの大きな課題である。

活動1年目で、本事業が住民の健康に何らかの影響を及ぼしているか、また住民の健康観や保健行動の変容がみられたかどうか、効果測定にはまだ時期が早いように考えられる。もっと長期間の活動を通して、長い目で見て、地域住民の保健行動の変容を期待しなければならない。今後この事業を継続することによ

て、本事業の目的や意義を周辺の地域住民に知っていただき、活動を藍野病院および藍野大学の周辺に広げ、本事業を定着させたい。華々しい盛り上がりを期待するのではなく、細々とではあっても誠実に粘り強く続けていくことが、やがて効果を生むことになると期待している。また、地区の自治会活動など地区組織活動と連携し、地域住民が主体となって実践する活動となるよう、藍野病院の独自性のある活動でサポートし、地域住民の皆様とハーモニーを奏するような健康作り活動をめざしたいと考える。

引用・参考文献

- 1) 日本看護協会専門職務部編：平成15年度地域における看護提供システムモデル事業（まちの保健室）報告書，日本看護協会，1頁，2004
- 2) 健康・体力づくり事業団：健康づくりに関する意識調査報告，[http://www.kenkounippon21.gr.jp/kenkounippon21/database/data\\_1/5\\_kenkouzukuri](http://www.kenkounippon21.gr.jp/kenkounippon21/database/data_1/5_kenkouzukuri)，2001
- 3) フランシスコ・コントレラス著，山口武共著・訳：21世紀の健康 現代医学は生き残れるか，河出書房新社，13頁，1999
- 4) ローレンス・W・グリーン，マーシャル・W・クローイター著，神馬征峰他訳：ヘルスプロモーション PRECEDE-PROCEED モデルによる活動の展開，医学書院，24頁，2000